

世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

集英社版 日本子どもを守る会 編



《2》人類愛の物語

勝海舟 シュバイツァー ナイチンゲール 曾田嘉伊智 ジェ
ーン=アダムズ 瓜生岩子 ジョセフィン=ベーカー ワシントン





世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

日本子どもを守る会・編

集英社

《2》人類愛の物語

- アブラハム・ダービー
- アンデルセン
- アンリ・デュナン
- 石川倉次
- 石原幸一
- 井上でん

- 坂本竜馬
- シートン
- シーボルト
- ジェンナー
- ジェーン・アダムズ
- シューマン

ユバイツァー
|セフィン・ペーカー
道 産

- 大庭源之丞
- 大原幽学
- 岡倉天心
- 小川正子
- 尾崎行雄
- 柿右衛門
- ガガーリン
- 勝 海舟
- 葛飾北斎
- ガリレオ
- 河上 肇
- ガンジー
- 北里紫三郎
- 木原 均
- キュリー 夫人
- 金原明善
- クーヘルタ
- 屈 原
- 古賀忠道
- コッホ
- コッホ
- コロンブス

- 神八三郎
- スコット
- ストー夫人
- 禅 海
- 曾田嘉伊智
- ゾ ラ
- 孫 文
- 高野長英
- 高村光太郎
- 滝廉太郎
- タコール
- 田中正造
- 玉川庄右衛門
- 玉川清右衛門
- ツオルコフスキー
- 津田梅子
- ティスニー
- 豊田佐吉
- トルストイ
- ナイチンゲール
- 中西悟堂
- 並河成資
- ニューフス

- 二宮金次郎
- ネルー
- 野口英世
- 野口幽香
- ハーゲンベック
- バートランド・ラッセル
- 橋本五郎右衛門
- 平賀源内
- 平塚らいてう
- ファーブル
- フォード
- 福沢諭吉
- ベートーベン
- ベーブルース
- ペスタロッチ
- ホセ・リサール
- 積有恒
- 牧野富太郎
- 松木莊左衛門
- 宮沢賢治
- モーツァルト
- 本木昌造
- ユーゴー
- ライト兄弟
- リビングストン
- 良 寛
- リンカーン
- ロダン
- ロバート・オーエン
- ロマン・ロラン
- ワシントン
- 渡辺華山

世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

会との申合
せにより検印
を省略します

NDC 280
集英社・昭和38年
P 260 22cm

第2巻 人類愛の物語

昭和三十八年六月十日 印刷
昭和三十八年六月十八日 発行

編 日本子どもを守る会

発行者 陶 山 巖

印刷者 大 橋 貞 雄

印刷所 共同印刷株式会社

製本所 石 毛 製本所

本文用紙 大昭和製紙株式会社特選

発行所

株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二一三
電話大代表(03)322 振替東京 五五五

定価三九〇円

はじめのことば

人間の生活にかかすことのできない心の栄養素のひとつ、しかも、その栄養素の根源

ともいえるのは愛である。愛は、まず、身のまわりの人びとのあいだに花ひらく。しかし、真の愛のはたら

きは、そのようなせまい範囲にとどまてはいない。愛は、家庭から世の中へ、祖国へ、さらにひろく世界

人類へとひろがっていく。わたしたちが、地球を愛の花たばでおおてしまうとき、世界平和のゆめもゆめ

ではなくなるのだ。この巻には、このひろく大きな愛を実行した人びとの物語をあつめた。



もくじ

世界100人の物語全集

《2》 人類愛の物語



剣つるぎと槍やりの林をくぐって

江戸えどの町と100万まんの町民を
戦火せんかから守まもった勝海舟かつかいしゅう

負まけない子…… 11

学問がくもんへの道…… 18

ふたりの客きやく…… 26

長崎ながさきへ…… 29

咸臨丸かんりんまるにのつて…… 34

時代じだいはうつる…… 40

命いのちをかけて…… 43

この物語ものがたりを読むまに…… 9

勝海舟かつかいしゅうの小伝しょうでん…… 10

塚原健二郎



ジャングルの聖者

病む黒人のために献身する

アルベルト・シュバイツァー博士

大きな手と握手…… 53

遠くて近い日本…… 55

教会の子…… 59

音楽一家…… 63

黒人の石像…… 66

観察と発見…… 70

村の子と同じに…… 76

スープはさらい…… 79

助けたスズメ…… 83

心にきざむ…… 86

かたい決心 詩よりも音楽を…… 88

おじさんの家…… 91

先生の教え…… 94

つらぬきとおす心…… 98

神の啓示…… 101

めぐみの天使

戦場で傷病兵の看護につくした
フローレンス・ナイチンゲール



大学を卒業したが…… 102

緑のパンフレット…… 104

アフリカのジャングル…… 108

それから五十年…… 110

この物語を読むまえに…… 51

アルベルト・シュバイツァーの小伝…… 52

クリミア戦争はじまる…… 117

二つの手紙…… 120

フローレンスのおいち…… 125

スクタリの野戦病院…… 129

壁にうつる影…… 132

クリミア熱にたおれる…… 135

高原の十字架…… 138

この物語を読むまえに…… 115

フローレンス・ナイチンゲールの小伝…… 116

こえた手を、いたむ胸を

韓国孤児の父、曾田嘉伊智



国をあげての悲しみのうちに…… 145

山本藤枝

韓国人に救われて…… 146

命のつづくかぎり…… 150

天の父、天の母…… 152

ハヌルオモニの死…… 156

第二のふるさとへ…… 159

この物語を読むまえに…… 143

曾田嘉伊智の小伝…… 144



ハル・ハウスの女主人

貧民街の中の大きな家…… 165

みにくいジェーン…… 166

人間はみんな平等…… 168

鈴木三枝子

世界中の人びとのよき隣人だった

ジェーン・アダムズ

働く人たちのために…… 171

ハル・ハウス式のおぎょうぎ…… 176

ひろがる仕事…… 178

国と国ともおとなりさん…… 183

この物語を読むまえに…… 163

ジェーン・アダムズの小伝…… 164



丹野節子

六十の手習い

まずしい人びとのための
病院をつくった瓜生岩子

めざましい活動…… 187

若松の女学者…… 190

六十の手習いに…… 194

鬼果令…… 198

努力もみのつて…… 202

この物語を読むまえに…… 185

瓜生岩子の小伝…… 186

子らよ、すこやかに

各国の混血児の保護につくす
元歌ひめジョセフィン・ペーカー



山主敏子

負けん気の女の子……………207
舞台へのあこがれ……………211

混血児の母となつて……………215

この物語を読むまえに……………205

ジョセフィン・ペーカーの小伝……………206



天はゆるさじ

アメリカ独立のために戦つた
ジョージ・ワシントン

今官一

新大陸の人たち……………221

植民地の人たち……………225

ヴァージニア人……………232

開拓者たち……………238

自由なアメリカ人……………244

独立十三州の人たち……………249

この物語ものがたりを読むまえに…… 219

ジョージ・ワシントンの小伝こでん…… 220

はじめのことば…… 1

写真口絵

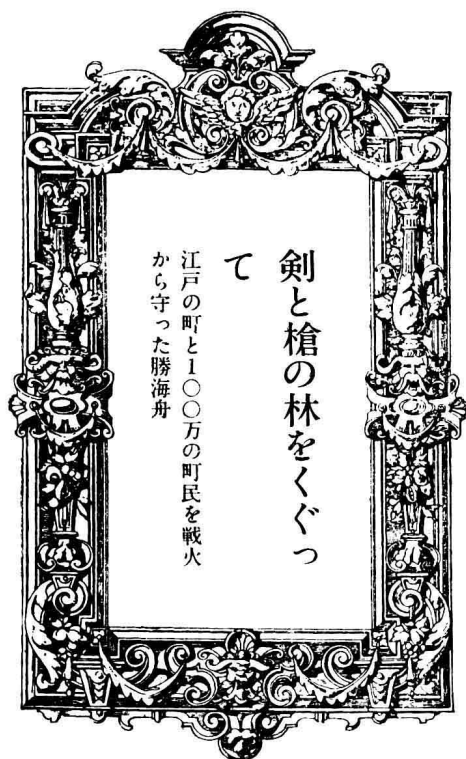
あとがき…… 253

作家紹介…… 260

文中の☆は、本文の重要じゅうようなところを写真図版しやしんずはんでしめしている。

装丁

A D 沢田重隆・D 鈴木康行



剣と槍の林をくぐつて

江戸の町と100万の町民を戦火から守った勝海舟

いまから百年ほど前、そのころ江戸といった東京の町は、西からのぼってきた官軍と、それをむかえうつ幕府がたの軍隊のしようとして、一めん焼野原になるところだった。

もし、戦争にでもなれば、武士はむろんのこと、政治や戦争に何のかんけいもない市民の命も、どれだけむだに、失われたことだらう。それを救ったのは、この物語の主人公、勝麟太郎だった。

この物語の背景になつてゐる明治維新は、近代日本の夜あけといわれるが、それはそれはたいへんなできごとだった。じぶんの正しいと思つた考えをつらぬくためには、命がけでいなければならなかった。大きな勇気が必要だった。麟太郎に、その大きな勇気をあたえたのは、いったい何だったのだろうか。

作・塚原健二郎 さしえ・佐多芳郎

勝海舟の小学

勝海舟は、幼名を麟太郎といひ、

一八二三年（文政六年）江戸（今の東京）の本所に生まれた。

父は、身分のひくい徳川幕府の家臣で、一家の生活はまづしかった。

ある日、おばさんの阿茶の局につれて、本丸の庭園にいったとき、

將軍の目にとまり、以後將軍の孫、初之丞のおつきとなった。

初之丞の死後は將軍家をおわれ、きびしい父の教育をうけ、はじめは

剣術や禪を学んだが、のち、新しい時代のきたことを知り、黒田藩の長井青涯について、蘭学を勉強した。

また、兵学や砲術を学ぶため、佐久間象山の門にはいったが、かれはまづしいので蘭学書をかうこともできず、オランダ語の辞典を一年かけて書きうつしたり、ずいぶん苦労をした。

一八五五年（安政二年）、幕府がはじめて、長崎に蒸気船の伝習所をひらいたとき、その伝習生となり、航海術や測量術を学んだ。一八六

〇年（万延元年）幕府の使節が、アメリカへ出かけたが、海舟はそのとき、みずから、咸臨丸という帆船の指揮者となつて、太平洋を、わたつた。

帰国してからは、幕府海軍の建設に力をつくし、また、明治維新の官軍入城にさいしては、参謀の西郷隆盛と交渉して、ぶじに、江戸城をあけわたした。

一八九九年（明治三十二年）一月七十七才でなくなつた。

参考図書

橋本敏夫著 勝海舟戊申日記（金鈴社）

山路愛山著 勝海舟（改造社）

山路愛山著 福翁自伝（改造社）

玉城肇著 日本歴史（大雅洞）

負けない子

麟太郎は、阿茶おばさんが好きだった。おばさんは黒いかみをご殿ふうにゆい、からだからは、かすかなにおいぶくろのかおりがながれている。

おばさんは、大奥につとめていた。大奥とは、江戸城の中の將軍のおくがたや、おつきの女たちのすむところだ。おばさんは、そこでは、阿茶の局とよばれている。

麟太郎は、このおばさんにつれられて、きょうは、お城へあがる日だった。將軍の孫の初之丞の遊び友だちに選ばれたのである。

麟太郎は、おばさんは好きだったけれど、お城へあがるのは、うれしくはなかった。第一父や、母に別れなければならぬ。それから、すんでいる町。

麟太郎の家のある本所は、江戸でも下町とよばれ、海に近かった。小さな川がいくすじもながれていて、遊ぶところはいくらもあった。また、みせもの小屋や、茶店屋のならぶ兩國のような、にぎやかなさかり場も、遠く

ないところにあつた。それに、なんといっても、麟太郎は、七才の少年である。

おばさんも、はじめ將軍からその命令のあつたとき、このまえの宿さがりに、麟太郎にせがまれるままに、お城のお庭拝見につれてきたことをくいた。

そこは、高い石がきと、堀と、その上に立っている老松にかこまれていた。広い庭には、あずまやや、池があつて、シダレザクラのかげをおとす池では、大きなコイヤ、ヒゴイが、ゆうゆうと、泳いでいた。

麟太郎は、はじめてみたひろい庭がうれしかった。やたらにしばふの上をとびあつた。しばふは、どこまでもつづいていた。気がついてみると、いつかこの池のまえにでていた。そのとき年とつた老人がしずかにかれの方へ歩いてきた。この人には、ふたりのわかい女の人がつきそつていた。老人は、三間（六メートル）ほどはなれたところに立ちどまると、少年のほうをみて、何かそばの人についている。女の人が、近くまで走りよつてきて、

「あなたは、どなたのお子ですか。」

と、きいた。

麟太郎は、はっきりした声で、

「阿茶の局につれられて、お庭拝見にあがった勝麟太郎です。」

と、こたえた。

女の人は、

「さあ、はやく阿茶さまのところへおもどりなさい。あそこにおいでになるのは將軍さまですよ。」

と、かるく、しかるようにいった。

麟太郎は、はっとなって、すぐにひざまずいて、頭をさげた。

これが、十一代將軍徳川家斉だったのだ。

家斉は、旗本の子どもの中から、孫の初之丞のおつきをさがすことになったとき、いつか、庭でみた少年を思い出した。きりっとした顔をしていたが、頭にのこっているのは、そのかしこそうな目である。阿茶の局をよんで、麟太郎をさしだすように、といいつけたのだった。

局は、

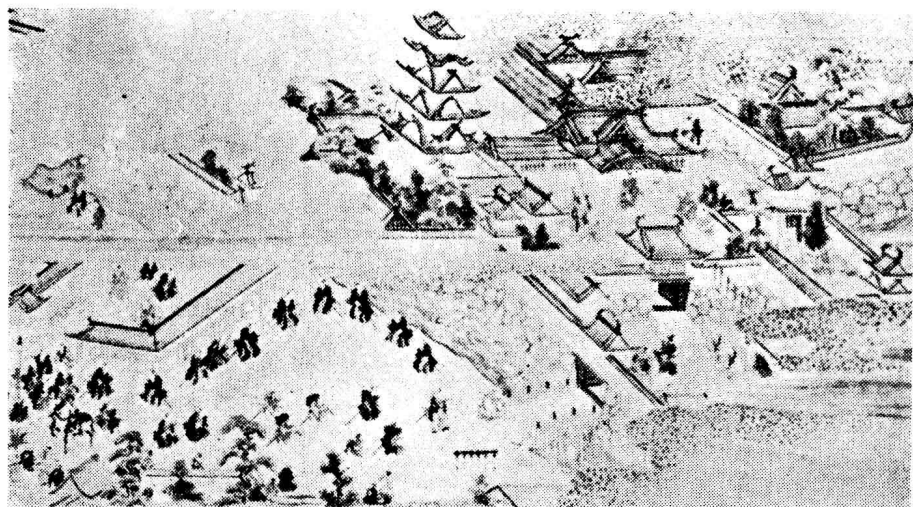
「まことにありがたいおことばですが、あの子は家もま



ずしく、身分もひくく、とても、ご殿にあがれるような者ではありません。先日、お庭拝見にあがりましたときも親類から、着物をかりてまいったようなわけです。」

と、いつてことわったが、家斉は、
「なに、身分などかまわぬ。さつそく

勝海舟 幕末の混乱期に、江戸の町民をすくった。おさないころから頭のよい人であった。



江戸城 将軍の居城であった江戸城は、とうじ11代将軍徳川家斉がおさめていた。この図では天主閣が見えるが、明暦の大火によって焼失したまま再建されなかった。

つれてまいれ。」

といって、きかなかった。

こうして、麟太郎は、将軍のお声がかかりで、つとめることにきまったのだった。

父の勝小吉は、四十俵どりの身分のひくい侍だった。

生まれた家は、かなりな旗本だったが、おさないうち、勝の家をついだのだった。剣術もでき、頭も悪くはなかったが、生まれつき、気性があらく、人に頭をさげることのきらいな小吉は、よい役につけず、くらしは、いつもびんぼうだった。

おばさんは、こんな勝の家のことを思うと、お城へあがることは、麟太郎のしょうらいのためによいのではなにか、とだんだん、考えるようになった。それで、かごをとばしてやってきたのだった。けれども、小吉も、母親も、あまりに思いがけないことに、なかなか決心がつかなかった。

そこで、おばさんは、将軍の「お声がかかり」をもちだし、

「麟太郎のためには、二度とないほどの出世のあしがかり

り。これをおことわりしては、目がつぶれるというものです。」

といつて、おともの女中に、かごから包みをもつてこさせた。中からは、着物やはかまやぞうりまででてきた。

それを見ると、麟太郎は、小吉のまえにいって、

「父上、わたくしはお城にあらがりたいと思います。」

と、いって手をついた。そして、おばさんから、着物を受け取り、さつさと、となりの座敷へはいっていった。

小吉は、ひどくはらがたつた。きれいな着物に目がくらんだのだと思つたのである。後ろから、

「ばかものめがっ。」

と、高い声をなげつけたが、麟太郎の決心は、かたかつた。着物や、はかまに、心がまよつたのではない。よその道場をあらしたり、金さえあれば酒のみ、さかり場へでかけて、けんかを売つたりといったような、父の生活がいやだった。一家をこのまづしい生活からすくい出す道は、いまをおいてはない——と、子どもながらも、心にきめたのである。

おさないうちから、大ぜいの女中やおつきのものに、

あまやかされて育つた、殿さまの子どもは、だれかれなく、わがままなもののだが、初之丞は、殿さまの中でも、一番上の殿さま、將軍の孫である。世の中にじぶんの思いどおりにならないものは、なにひとつないと思ひこんでいる。それなのに、こんどあがつた少年は、主人だからといつて、わざとすぐろくや、すもうに負け、また、りくつにあわないことにおそれいたりはしない。麟太郎の負けずぎらいは、父親ゆずりなのだ。

初之丞は、はじめはらをたてて、祖父にうったえたりしたが、麟太郎のほかの少年とちがうところが、だんだんとすきになった。ふたりは、お城の中をあばれまわり、植木のえだをおり、ときには、池のコイをぼうで、おいまわしたりした。

女中たちの中には、

「麟太郎さまは、おいたでこまります。」

と、いって阿茶の局のところへ、こごとを、もちこむものもあつた。

麟太郎は、大奥では、おばさんのへやにとまっていたから、そんなにさびしくはなかった。といつても、そこ